

おわりに

本手引書では、我が国の汽水域の河川環境における特徴や物理・化学的現象および人為的改変とレスポンスとの連関等を、既往文献、一級河川におけるアンケート調査、事例などを踏まえながら示した。また、汽水域における河川環境の状況およびそれを形成する物理・化学的現象を把握し、人為的改変によるレスポンスを予測するための調査・分析手法を示した。

本手引書により、中小河川も含めた現場における河川環境の適切な把握と管理がより充実するものと期待されるところであるが、汽水域における現象は複雑・多様なものであり、また土地利用の変化など流域の影響を常に受けることや、人為的改変による生態系への影響は長い時間を経て現れる場合があることを踏まえると、現況把握のための現地調査は継続していく必要があり、さらに人為的改変を行った場合にはそれによる河川環境の変化をモニタリングしていくことが重要である。モニタリングを行うに際しては、課題や地域性を念頭に置き、目的を明確にした上で項目、場所、期間、および頻度等を適切に設定する必要がある。

本手引書のとりまとめに際し、生物の取り扱いが課題となった。汽水域の環境を保全していく上で、どのような生物が生息・生育しているかは環境の状況を知る上で重要であるとともに、多様な生物が生息・生育していること自体が環境保全の目的そのものでもある。しかしながら、汽水域における生物とその生息・生育環境との連関については未解明な部分が少なくないことや生物の活動によっても物理・化学的現象が変化する場合もあり、現象の理解が一層困難になる恐れがあったことなどから、本手引書では、まず物理・化学的現象を中心にとりまとめ、生物へ与える影響については扱わないこととした。この点については、今後さらに現地における調査・研究を進め、知見を集積していく必要があると考えている。